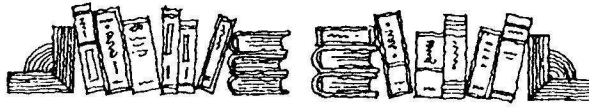


国語国文学会だより



No. 23

2000. 8

日本文学科卒業生の会

国語国文学会

春の総会・研究発表会報告

平成十二年度春の総会・研究発表会を五月二十五日(木)、香雪館二〇二号室で開催しました。

◆第一部 総会

(1) 国語国文学会会長挨拶

倉田宏子先生

(2) 奨学金授与

上村悦子賞

中島斌雄賞

(3) 国語国文学会委員長挨拶・役員紹介

(学生の会・卒業生の会)

(4) 平成十一年度活動・決算報告

(5) 平成十二年度活動計画案・予算案・監査選出

(4)(5)については、学生、卒業生より各々報告説明をし、各案件とも審議後承認

(6) 自主ゼミ発足(学生の会、卒業生の会) 承認

◆第二部 活動報告と研究発表

交換留学生挨拶(二名)

学部三年 ブラウン・ネファテリ・ジョーサファエー

イン (ウエルズリー・カレッジ)

学部四年 チェ・ジソン (梨花女子大学)

・報告

中原中也「在りし日の歌」に見る(鳥の啼く声)

——古今和歌集と比較して

近代自主ゼミ 秋田有美子氏

平安文学談話会活動報告——古筆を読む

平安文学談話会 戸田史乃氏

・研究発表

道教の受容——大伴旅人と金丹

新50 樋口千夏氏

◆新旧交代の会

秋季大会・公開講演会のご案内

▼日時 平成十二年十二月二日(土) 一時～

大和和紀先生を囲んで

——「あさきゆめみし」と「源氏物語」

文学部長後藤祥子教授、大学院生、学生、卒業生による座談会

☆講師略歴

大和和紀(やまと・わき)

札幌市出身。一九六六年週刊少女フレンド三七号、「どろぼう天使」でデビュー。「はいからさんが通る」「アラミス」「あさきゆめみし」など、幅広い作風で大ヒットを連発する少女漫画界の大御所。講談社「BE LOVE」誌上で「にしむく士」、「KISS」で「ベビシッター・ギン!」を連載中。東京在住。

▼講演

「日本語の対話における聞き手の役割」

本学 田辺和子助教授

▼懇親会

終了後、生協食堂ウィミンにて
会費 三千元 学生千五百円

*研究発表会

発表者募集

午前十一～十二時

詳細は四面参照

平成十一年度の活動につきましては、昨年度より「国語国文学会だより」の秋の号の発行を冬に号に変更致しましたのでそちらを参照ください。

平成十二年度卒業生の会活動計画案

(1) 総務

・春季総会・研究発表会の開催

五月二十五日(木)

・はがき通信 四月・十一月

(2) 企画

・自主ゼミの設立

・秋季大会の開催 十二月二日(土)

・研究発表大会・総会・講演会・懇親会

・文学散歩の実施 奮ってご参加ください

十月二十八日(土)

明年、創立百年を迎えます。創立者成瀬仁蔵先生への感謝をこめ、学内とゆかりの地散策を企画しました。

申し込み・問い合わせ先 新妻佳珠子氏

〇四二二―四四―四六九一

(十月二十三日～二十六日 夜

間に電話する)

・談話会の企画・実施

(3) 会計

・会費納入への協力依頼

・活動充実のための備品の整備・購入

(4) 編集

・「国語国文学会だより」の発行

夏号(二十三号) 八月
冬号(二十四号) 十三年一月
・新名簿の作成・発行(十三年一月予定)

平成十二年度常任委員

総務 児玉久美子(旧46) 高野晴代(院14)

藤木直美(院31) 黒川晴美(新33)

企画 立川和子(新1) 新妻佳珠子(新3)

菅野富邇子(新11) 土橋ユリヨ(新31)

平山静(新34)

会計 津田英子(新6) 齊藤令子(新6)

編集 実藤恒子(新7) 高橋順子(院18)

中田和子(院27) 杉本まゆ子(院29)

本年度の会計監査は保志美也子さん(新12)、猶場三保さん(新11)です。

平成十二年度研究サークル

*平安文学談話会(古筆を読む)

金曜日 午後四時半(年十回)

日本文学科研究室

・高野晴代 〇三(三三七〇) 六八〇六

*皇女研究会(皇女総覧平安朝篇の作成)

不定期 土曜日 午前十時半

大学図書館共同研究室

・柳澤理恵子 〇四五(八四二) 六五二五

*古代中世文化論ないし芸術論(古今著聞集)

毎月第四木曜日 一時半～三時半

日本文学科資料室四二六

・山田佐和子 〇三(三九七二) 四八四三

日本女子大学国語国文学会卒業生の会 平成11年度決算報告(平成12.3.31日現在)

【収入の部】

(円)

項目	予算	決算
前年度繰越金	1,099,783	1,099,783
会費	550,000	363,207
利子	0	657
収入合計	1,649,783	1,463,647

【支出の部】

通信費	350,000	315,569
文具費	30,000	2,779
コピー代	15,000	6,640
会報印刷費	140,000	59,505
名簿作成費	300,000	6,000
委員会活動費		
・委員会費	20,000	9,297
・交通費	40,000	34,000
・行事費	10,000	0
ゼミ費	30,000	40,000
講演会費(講演料)	60,000	60,000
大会諸経費	30,000	6,925
設立準備金(10回目)	120,000	100,000
慶弔費	10,000	0
パソコン完備費用	150,000	0
予備費	344,783	4,700
支出合計	1,649,783	645,415

次年度繰越金 ￥818,232

上記の通り決算報告致します。

会計 津田英子



監査の結果、上記決算報告が正確であることを認めます。

監査 岩野圭子



荻窪昭子



平安文学談話会活動報告「古筆を読む」

博士課程後期三年次 戸田 史乃

平安文学談話会は、後藤祥子先生の研究室の大学院生を中心として「古筆を読む」というテーマを設け活動を行っている。活動内容は、主として出光美術館の別府節子先生をお招きして古筆についてご教授頂いたり、都内近辺の美術館で見学会を行ったりするという形をとっている。

さて、この「古筆」とは何か。「古筆」とは古人の筆跡全般を示す。具体的な条件として、まず「古人の筆跡であること」、「仮名書きであること」があげられ、書かれたスタイルとしては「和歌集・物語・注釈書であること」があげられる。字以外の部分では「書写本で料紙が美しいこと」があげられ、時代としては「平安から鎌倉（14世紀）までに書写されたもの」をいう。

その古筆のほとんどは和歌集である。平安時代の貴族生活と和歌は密接な関係にあるので、それらは美しい料紙や中国などから伝来した珍しい紙に能書家によって書かれ、そうして書かれた本は飾りかねた調度手本として親しまれるようになるからである。その後室町時代の終わり頃には茶の湯の掛物としての需要を受けたり、手鑑（切り取られた断簡、また色紙・短冊などを貼って収納し鑑賞するために書家の愛好家によって作られたもの）の流行などにもない本は切り離されるようになり、古筆は冊子や巻物から断簡へと姿を変え「古筆切」と称されるようになる。桃山時代頃からはこれら古筆切を鑑賞することが盛んになり、近世に入ってから断簡でも所蔵したいという鑑賞者の願望から手鑑からも古筆が切り取られるようになる。近代に入ると手鑑の中から筆跡として美しく価値の高い古筆切が剥がされ、掛け軸や手鑑として鑑賞されるようになって

いった。

これらの手鑑を鑑定する古筆見も桃山時代頃から出てきた。筆者不詳の断簡に、その書様に相応の時代に生きてきた有名な人で、いかにもそれらしい人筆者と推量し、極め札という小さな札である鑑定書に伝来や名称、筆者を記すという作業が行われるのである。そして、一定の配列のもとに古筆切が並べられ極め札がつけられ手鑑の様式は整備された。実際にはこの極め札にある筆者は信憑性のないものが多いが、古筆見たちが古筆切の書風などから書かれた時代を割り出してその切れにふさわしい筆者をあてているので、ある古筆切のおおまかな書写年代をつかむには有効で、古筆の格付けとしてたいへん参考になるのである。

このように手鑑には、鎌倉から南北朝時代の間に散逸してしまった書籍の断簡や完全に伝わらない書籍の断簡などがあるので、国文学の資料として貴重なものも多く見ることが出来るのである。芸術品として、資料として、歴史を背負って伝えられてきたものなのである。

これらの古筆の特徴をつかむためには「字形」「線質」「連綿」について注意して見るとよい。字形はどうか、線の具合はどうか、鋭いか柔らかいか、細いか太いか、連綿の続き具合はどうかということへの注意は、時代ごとの仮名の特色を示している事にも気付かされる。平安の仮名は、「字形が端正で優雅、調和がとれていて均衡である。一定の角度がついている。直筆で線が細くシャープで澄み切

日本女子大学国語国文学会卒業生の会 平成12年度予算案（平成12.5.25）

【収入の部】	
前年度繰越金	818,232
会費	695,136
収入合計	1,513,368
【支出の部】	
通信費	350,000
文具費	20,000
コピー代	15,000
会報印刷費	140,000
名簿作成費	300,000
委員会活動費	
・委員会費	20,000
・交通費	40,000
・行事費	10,000
ゼミ費	30,000
講演会費（講演料）	60,000
大会諸経費	30,000
設立準備金	142,570
慶弔費	10,000
パソコン関係諸経費	20,000
予備費	325,798
支出合計	1,513,368

った印象をもつ。直筆、起筆に丸みがあり転節部がなめらか。細いけれど力強い。連綿はよくつながっていてゆつたりとしなやか、のびのび、直線的に流れる。」というような特徴がある。これが時代が下がつて鎌倉時代になると、「謹直で、四角の中に納まる形。謹直・湾曲している。線は測筆で肉厚の線がめだつ。穂先があらわな線。一字一字をしつかり書くので単体化している。」という特徴をもつ。さらにその後時代が下ると鋭く尖った感じだが重くなり、形式化してますます側筆がめだつようになっていくのである。

そしてこれら古筆の中でも代表的なのが高野切である。これは『古今和歌集』の断簡のことで、書写年代が古くて最も優秀で有名なものである。秀吉が高野山の僧兵の勢力を恐れ攻略しようとした時、木食上人応其が秀吉を説いて思いとどまらせたという。その縁で、秀吉は手許に秘蔵していた紀貫之筆と伝えられる古今集巻九の巻頭一紙を木食上人に贈ったので、「高野切」と呼ばれるようになり、古今集の他の巻までもすべてこれにちなんで「高野切」と

呼ばれるようになったのである。筆者は紀貫之だとされるが、これは貫之が『古今和歌集』の撰者の一人で歌人としても優れた人であり、歌人の古筆筆者のうち最も古い人だから、高野切の筆者として最もふさわしいと考えられたからである。だが前述したように、鑑定ではその書に最も望ましい人があてられるため、本当の筆者は貫之ではない。高野切自体、一人の手によって書かれたのではなく三人の手によつて書かれたものなのである。この高野切の字は、「時代的に11世紀半ば頃の仮名。字形が端整。けわしさ、きびしさがない字。均衡、調和、繊細がしまっている字。筆線が細く、シャープ。連綿が発達している。」という特徴を持ち、そして三種類それぞれに特徴を持つている。古筆は基本としてこの高野切に着目するとよくわかるようになっていく。筆が発するエネルギーを感じるために古筆をどのように鑑賞したら良いか。この会では様々な方向から鑑賞することができると学んで来た。個人的にはこれまで仮名を主眼に見てきたが、古筆を見るのに重要なもう一つの要素である仮名が書き付けられた料紙そのものにも注目して見ていきたいと考えている。今後也会の活動とともに鑑賞の目を肥やしていきたいと思う。(国語国文学会春季大会の発表より)

研究室だより

○浅野三平先生と麻原美子先生が、本年三月、ご定年をお迎えになられました。

浅野先生は、昭和五十四年、近世文学専攻の教授としてご着任以来、二十一年の長きにわたり本学にて教鞭を取られました。麻原先生は、昭和四十一年、中世文学専攻の専任講師としてご着任以来、三十四年の長きにわたり母校で教鞭を取られました。

その間両先生はともに、学科主任、大学院の日本文学専攻主任、文学研究科委員長の要職を歴任され、大学全体の発展にも多大な貢献をなさいました。その功績を称えられ、さる六月二十三日、大学法人より名誉教授の称号を授与されました。また、それに先立つ本学会の本年度春季大会で、両先生に本学会の名誉会員におなりいただくことが満場一致で決定致しました。両先生のますますのご活躍とご健康をご祈念申し上げ、また、今後とも変わらず私どもをご指導賜りますことをお願い申し上げます、感謝に代えたいと存じます。

○浅野先生のご後任として、近世文学専攻の鈴木健一先生を茨城大学からお迎え致しました。麻原先生のご後任には、中世文学専攻の石井倫子先生をお迎えいたしました。

○昨年度、実践女子大学を中心に国内研修に出られていた後藤祥子先生が、ご帰任されました。後藤先生は、本年度より文学部長の要職にお付きになりました。

○今年度は、清水康行先生がロンドン大学を中心とした海外研修に出られていらつしやいます。

○他の先生方は昨年と変わりません。

小川靖彦先生(上代文学)

後藤祥子先生(中古文学)

石井倫子先生(中世文学)

鈴木健一先生(近世文学)

源 五郎先生(近代文学)

高橋智子先生(近代文学)

藤原浩史先生(日本語学)

石田敏子先生(日本語教育学)

谷中信一先生(中国思想史)

田辺和子先生(外国人留学生特別科目)

田中 功先生(図書館情報学)

倉田宏子先生(近代文学)の十二名です。

○助手さんは、白石美鈴さん、溝部優美子さん、伊藤江美さん、非常勤の稲員直子さん(昨年までの担当者八木京子さんと交替)です。

○国語国文学会の担当は、鈴木先生、高橋先生、白石さんです。(日本文学科長 倉田記)

*研究発表会 発表者募集

・日 時 平成十二年十二月二日(土)

・発表時間 三十分、質疑十分

・応募資格 本学会国語国文学会会員

・応募方法 四百字以内に発表要旨をまとめ、論題とともに申し込む。

・応募先 日本文学科研究室

・締め切り 平成十二年九月末頃

*「国文目白」第四十一号日本文学科年表制作

スタッフ募集

本学会国語国文学会誌「国文目白」第四十一号では、二〇〇一年に日本文学科が旧制国文学部から数えて創設百年を迎えることを記念して特集を組みます。その柱となる日本文学科年表の制作スタッフを募集します。

①卒業生・在校生計十名。

②二〇〇一年十月入稿

③連絡先 小川靖彦先生(Ⅷ〇四八―四七二―二八八〇) (四十一号編集担当)

④本年十月七日(土) 十三時、演習室2にて第一回会合予定

国語国文学会だより

・発行日 二〇〇〇年八月三十一日

・発行者 日本女子大学国語国文学会

卒業生の会